

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530713

研究課題名(和文)よみがえる祝祭空間 - 芝居小屋復興の文化社会学

研究課題名(英文) Reviving Festival Spaces - Cultural Sociology on Revival of Local Japanese Theaters

研究代表者

芦田 徹郎 (Ashida, Tetsuro)

甲南女子大学・人間科学部・教授

研究者番号：20151053

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)： 康楽館(秋田県)、ながめ余興場(群馬県)、永楽館(兵庫県)、金丸座(香川県)、内子座(愛媛県)、嘉穂劇場(福岡県)、八千代座(熊本県)など、日本各地で戦前に建てられた古い芝居小屋の復興の動きがみられる。そのほとんどは、いつときは実質的な活動を中断し、取り壊しや倒壊の寸前にまで追い込まれていたものの、奇跡的に生き残り、蘇生したものである。今では、それらの多くは地域再生の中核施設として再活用に向けての施策や運動も進められているのである。本研究では、相当数の芝居小屋の実態調査を実施、それらの再生の契機と経緯、活動・活用実態、地域社会へのインパクトなどを探った。

研究成果の概要(英文)： There have been revivals of some old-fashioned local theaters that were constructed in Japan before World War II, such as Korakukan(Akita-ken), Nagameyokyojo(Gunma-ken), Eirakukan(Hyogo-ken), Kanamaruza(Kagawa-ken), Uchikoza(Ehime-ken), Kahogekijo(Fukuoka-ken) and Yachiyozza(Kumamoto-ken). Most of these theaters once substantially closed their doors and were brought to the verge of destruction or collapse, but somehow survived and were subsequently revived. Nowadays many of these theaters are expected to be centers of revitalization of local communities. I investigated the actual situations of a good number of these kind of theaters. And I searched how and why those theaters had revived and how those had been used. I have also considered the effects of the revivals on local communities.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：芝居小屋 祝祭 文化財 産業遺産 町づくり

1. 研究開始当初の背景

戦前に建設されながら現在も現役で、公演時には祝祭的な昂揚に包まれる古い芝居小屋が全国にいくつかある。しかし、そのほとんどは、高度経済成長期前後に経営不振と老朽化で、解体または倒壊の寸前にまで追い込まれ、その後奇跡的に再生を果たしたものである。本研究は、現在日本の各地で見られる古い芝居小屋の復興に注目し、その地域社会的及び文化社会的な、現代的意義と課題を解明しようとするものである。

2. 研究の目的

報告者は、これまで、祭りや「むらおこしまちづくり」の実証研究を長年継続してきた。当研究は、そうした経験とそこから得られた知見の上に立ち、芝居小屋復興の意味と意義を総体的に把握することを目的としている。より個別的には、芝居小屋復興の地域社会的要因、復興した芝居小屋の活動/活用実態、芝居小屋復興の地域社会へのインパクト、芝居小屋復興の現代社会論的意味、を明らかにすることを目指した。ただし、本報告は、紙幅の関係で、主として復興の経緯に関する記述を中心にしている。

3. 研究の方法

本研究では、現地での徹底的なフィールドワークに努めた。より具体的には、地元新聞記事等の文献資料の収集(複写を含む)、関係者への聞き取りとインタビュー、観察調査とオーディオ・ヴィジュアル・データの記録等の方法を併用して実施した。

調査対象としては、康楽館(秋田県小坂町)、旧広瀬座(福島県福島市)、ながめ余興場(群馬県みどり市)、粟津演舞場(石川県小松市)、呉服座(愛知県犬山市)、永楽館(兵庫県豊岡市)、旧金毘羅大芝居・金丸座(香川県琴平町)、内子座(愛媛県内子町)、嘉穂劇場(福岡県飯塚市)、八千代座(熊本県山鹿市)の、現に活動(展示/見学を含む)している芝居小屋から、旧共楽館(茨城県日立市)、鶴川座(埼玉県川越市)、でか小屋(石川県七尾市)、翁座(広島県府中市)の、現在は転用または閉鎖されているものまで、研究密度の濃淡はあるが、かなり多数の事例を取り上げることができた。

4. 研究成果

(1) 芝居小屋復興の概要

江戸時代において厳しく設置が制限されていた常設の芝居小屋は、明治時代に入って次第に自由な建設が認められるようになり、

大正時代には、全国で7千から8千もの多数に上っていたという推計もある。しかし、第2次世界大戦後は、しばらく演劇や映画で賑わったものの、1960年代の高度成長期に入ると、娯楽の多様化、とりわけテレビの普及の影響を受けて減少し、1970年代に入るとほぼその姿を消すことになる。今でも何ほどの活動を続けている芝居小屋は、全国でも10余に過ぎないのではないかと推測されるのである(農村舞台を除く)。

数少ない「生きている芝居小屋」にしても、そのほとんどは、いつかは閉鎖の憂き目にあっており、取り壊さないしは倒壊寸前にまで追い込まれながら、奇跡的な再生を果たしたものである。本研究は、これらの芝居小屋が、いかにして、またどのような理由で復活したのかを追跡するとともに、今後の可能性と課題と探ろうとするものである。

(2) 「小屋」が「芝居」か？

日本の高度経済成長とともに古い芝居小屋が次々と姿を消していく中で、廃館ないし休館状態にありながらも生き残っている芝居小屋に、まさに「数少ない生き残り」のゆえに、注目を浴びるものが出てくる。その走りは、1836年(天保7)に「金毘羅大芝居」として完成した香川県琴平町の金丸座であろう。この芝居小屋は、1953年(昭和28)にいったん香川県重要文化財に指定されるものの、1964年(昭和39)には老朽化を理由に解除される。細々と続いていた映画館としての営業も、そのころ停止する。ところが1970年(昭和45)になって、「旧金毘羅大芝居」として国の重要文化財に指定されることになる。県と国との2度にわたる文化財指定のポイントは、「現存する日本最古の芝居小屋」ないし「現存する江戸時代唯一の歌舞伎劇場」というところにあった。

さらにこの小屋は、1976年(昭和51)、現所在地に移築され、江戸時代の元来の姿に復原されるが、それは、あくまでも文化財として保存(保護)されるべき建物なのであり、芝居小屋としての利用は大きく制限されるものであった。すなわち、芝居小屋の「小屋」の部分が歴史的価値を持つものとして重視されたのであり、「芝居」を掛けることは、ほとんど考慮の外だったのである。

同じころ、1874年(明治7)に創建され、1892年(明治25)に移築されていた大阪府池田市の呉服座(くれはざ)が、1971年(昭和46)、愛知県犬山市の博物館「明治村」で移築保存されることになった。明治村は、明治時代の建造物等の歴史的資料を収集・公開することを目的に、1965年(昭和40)に愛知県犬山市に開館した野外博物館である。この場合も、歴史的に貴重(稀少)な建物としての芝居「小屋」(建物)の保存展示が目的であり、保存(保護)を損なう恐れのある「芝居」(実演)は、当初は想定されていなかったのである。

このように、スポットライトを浴びる古い

芝居小屋が徐々に出てくるなかで、「小屋」(建物)よりも「芝居」(実演・興業)で注目される芝居小屋が現れる。福岡県飯塚市の嘉穂劇場である。この芝居小屋は、1931年(昭和6)に建設されたものであり、金丸座はもとより呉服座と比べてもかなり新しい。1970年(昭和45)当時は、まだ築40年ほどにすぎず、建物自体の歴史的・文化的価値は微妙である。ところが、「芝居」を続けている「小屋」は、その頃すでに「時代物」になっていたのである。

旧筑豊炭田を形成していた遠賀川流域(いわゆる「川筋」)には、昭和初期に30を超える芝居小屋があったといわれている。しかし、戦後は次々と姿を消していき、1970年代にはこの劇場を残すだけになっていた。その嘉穂劇場にしても、戦後10年ほどは年間の開演日数が300日を超えていたのが、1960年代に入るとともに減り続け、1970年代にはほぼ30日台で推移するまでに激減し、経営は危機的状況にあった。それでも芝居を続ける小屋と、それを「細腕」で支える女性経営者への生き方に、共感と支援が寄せられるようになる。

1960年代の中ごろからは、新聞紙面にこの「生きている芝居小屋」を取り上げる記事が現れ始める。そして、1970年代に入ると、建築学(小屋)や演劇学(芝居)の学問分野からも、関心が示され始めるのである。こうした関心の高まりを集成する形で、1977年(昭和52)には、『定本 嘉穂劇場物語』(創思社出版)が出版された。興味深いことに、そこには、「劇場〔建物〕を見にくるだけのお客さんじゃあ、だめなんです。……芝居をせん、空っぽの小屋なんか、意味はなかバイ。記念館になるぐらいなら壊してしもうた方がよかたイ」という、劇場主の証言が収められている。「芝居あってこそその芝居小屋」という考え方は、その後の芝居小屋復興の主流になっていく。

(3) 「小屋」も「芝居」も！

1984年(昭和59)、あるテレビ番組で中村吉右衛門、澤村藤十郎、中村勘九郎という、当時の歌舞伎界の若手ホープのあいだで、金丸座(旧金毘羅大芝居)が話題にのぼり、この小屋で芝居をしたいということで意見が一致した。この企画は実現に向けて順調に進み、翌1985年(昭和60)6月には、中村吉右衛門、澤村宗十郎、澤村藤十郎などの出演で「四国こんぴら歌舞伎大芝居」が開催され、大きな反響をよんだ。この公演はその後恒例化し、2016年(平成24)には、第30回記念を迎えた。毎年4月(または5月)の公演期間中、この芝居小屋は全国から歌舞伎ファンを集め、町じゅうが華やかな祝祭的雰囲気包まれるのである。

1970年代くらいまで、重要文化財はもっぱらその保存(保護)が重視され、建物は展示公開されても、本来の用途での利用はきわめ

て困難とみなされていた。その重要文化財での芝居の公演が可能になったことについては、「積極的に活用を図ることによって保存を促すという、〔文化財保護政策上の〕発想の転換」(『文化財保護法五十年史』文化庁2001)があった。かつては、文化財に指定されれば、「釘一本打てない」といったことが、まことしやか言われていたものである。

こうした文化行政の転換の背景には、より大きな時代の風の変化がある。1973年(昭和48)にはいわゆる「オイルショック」が起こり、日本の高度経済成長に決定的な終止符が打たれる。翌1974年(昭和49)は、戦後の日本経済が初めてマイナス成長を記録するのである。そして、時代の大きな流れは、それまでの「経済」一辺倒から「心」や「文化」の重視へと、大きく方向を変える。「ブーム」といわれるほどに「宗教」回帰への注目が集まり、日本各地で「祭り」の復活が話題になる。こうした「心の時代」や「文化の時代」の到来は、他方で、「心」や「文化」が経済資源になり得ることを、予感させるものでもあった。この時代の流れのなかで、「芝居」(実演)に積極的に取り組み、「小屋」(建物)の動的な活用を図ろうとする動きも出てくる。

秋田県小坂町の康楽館は、日本有数の鉱山として栄えた小坂鉱山の従業員慰安施設として、1910年(明治43)に落成した。しかし、この劇場も、戦後はご多聞にもれず老朽化と機能低下が進む。そして、1970年(昭和45)からは、まれに集會や催し物があるものの、映画も含め一般興行を停止していたのである。しかしその後、保存と活用を望む声の高まりを受けて、1985年(昭和60)には小坂町に無償譲渡されて修復が始まり、秋田県による文化財指定をへて、翌1986年(昭和61)に町営の芝居小屋として復活したものであった。そしてこの年から、大衆演劇「伊藤元春一座」による常設公演が始まる。この公演は、その後20年の間に、実に1万回超という驚異的な公演回数(1日複数回公演)を記録することになる。この常設公演は、その後一座の交代はあったものの、現在も続いている。文字どおり、「生きている芝居小屋」に蘇ったのである。

(4) 芝居小屋の「底力」

さらに、康楽館の復活は、「町づくり」の基本コンセプトをも決定することになる。1990年(平成2)、この芝居小屋が面する通りが「明治百年通り」と位置付けられ整備される。2001年(平成13)には、隣接地に旧小坂鉱山事務所(明治38年創建)が移築復原されて、一帯は歴史文化観光ゾーンを形成する。そして、翌2002年(平成14)、康楽館は、旧小坂鉱山事務所とともに国の重要文化財に指定され、さらに2007年(平成19)、これら2つの「文化財」は、ともに「近代化産業遺産」に認定された。こうして小坂町は、芝居小屋の復活を契機にして、鉱工業の他に、その歴史に

立った文化観光という、町づくりのもう一つの柱を確立することになるのである。

熊本県山鹿市の八千代座の復活も、町づくりの方向性に大きな影響を与えた例である。1910年(明治43)12月に竣工し、翌年1月にこけら落としをしたこの芝居小屋は、康楽館と同じく明治末年の建設であるが、江戸時代の遺風を残すとされている。この八千代座も、他の芝居小屋と同様の盛衰をたどり、1970年ごろにはほとんど使われなくなり、やがて、いつ取り壊されても、そのまま朽ち果てても、不思議ではない、廃屋同然の老残をさらすようになっていた。

ところが、1970年代の中ごろから、再生を願う声が少しずつ上がり始める。1980年代の中ごろには、今も語り草の「老人パワー」に牽引され、急激な高まりをみせる。そして、1988年(昭和63年)、あたかも住民たちの熱気にあおられるかのように、国による重要文化財の指定が決まるのである。さらに、1990(平成2年)からは、人気女形歌舞伎俳優の坂東玉三郎の公演がほぼ定例化し、5年近い年月と10億円余りの総工費をかけての「平成の大修理」と呼ばれる半解体的な大規模復原工事を、2001年(平成13)に成し遂げ、かつての隆盛に勝るとも劣らない復興を遂げることになる。今日では、玉三郎公演の他、歌舞伎や演劇・演芸、コンサートやさまざまな発表会、それに講演会や各種集会以での利用も多い。さらには、建物=文化財目当ての見物・見学者も多数訪れる。このように、八千代座は、いまやこの地の文化と観光の一大拠点となっている。

しかも、八千代座復興の効果は、この芝居小屋の活用にとどまるものではない。当時、山鹿市でも古い街道沿いの町並みを生かした町づくりが模索されていたが、その動きは必ずしもスムーズではなかった。そこに古い芝居小屋の復興が実現したことで、この構想が大きく前進することになる。いわば、一芝居小屋の復興が町の再生への起爆剤の役割を果たすのである。2007年(平成19)に出た『山鹿市市勢要覧』は、八千代座の復原は、「山鹿市中心市街地活性化に取り組む上で、だれにとってもわかりやすい“目に見える”目標だった」と振り返っている。また、同じ年にまとめられた「第2次八千代座整備構想」は、「活きた芝居小屋」として再生した八千代座を、町の「賑わい」の復活のもと、市民の「誇り」と位置づけたうえで、「しかし、八千代座の底力はこの程度のものではない」とうたい上げている。

康楽館や八千代座の復興にあたっては、文化財基準の緩和という、文化行政の変化も追い風になったところがある。特に八千代座の場合、復興にとって決定的な転換点となった国重要文化財指定は、いくぶん唐突といえなくもない、事態の急展開であった。芝居小屋の重文指定は、1970年(昭和45)の旧金毘羅大芝居(金丸座)が最初であるが、当時は、建

築物の指定は江戸時代までのもの、というのが一応の基準だったようで、この芝居小屋も、天保7年(1836)の建築である。ところが、1984年(昭和59)には、明治7年(1874)創建の呉服座が芝居小屋として2番目に指定され、さらにその4年後には、明治末年の建築である八千代座も3番目の指定を受ける。その後も、八千代座よりわずかに早く落成した康楽館が、2002年(平成14)に国の重文指定を受け、2007年(平成19)には、近代化産業遺産にも認定されて、「生きている」芝居小屋の権威づけに、大きな一役を買っている。この他にも、芝居小屋で国重要文化財の指定を受けているものとして、1887年(明治20)ごろに建設され、現在福島市の「福島市民家園」に保存されている広瀬座がある(1998年指定)。

(5) 町づくりのなかで

康楽館や八千代座とは逆に、歴史・文化を生かした町づくりの一環として、再生を遂げた芝居小屋もある。愛媛県内子町の内子座は、3年をかけての復原工事をへて、八千代座の再生よりも早く、金丸座の歌舞伎公演が始まるのと同じ1985年(昭和60)から、さまざまな利用に供する「生きた芝居小屋」として復活した。同座は、1915年(大正4)に建設された。戦後は、芝居小屋から映画館、さらには事務所へと転用され、老朽化が進んで存廃の岐路に立つという、お定まりのコースをたどっていた。

それが息を吹き返すきっかけになったのは、1982年(昭和57)に同町の八日市護国地区が国の「重要伝統的建造物群保存地区」(伝建地区)に選定され、「まちづくり」の方向性が定まったことであった。同地区は、かつて木蟬と和紙で栄えた内子の栄華を偲ばせる、古い建物が軒を並べている。内子座はそこから外れているが、町並みの再評価と共に、歴史遺産の一つに位置づけられたのである。今では、定例の文楽公演でよく知られている。

兵庫県豊岡市出石町の永楽館のケースも、内子座と似たところがある。いまは豊岡市の一部である(旧)出石町は、江戸時代には城下町として栄え、現在でも「小京都」の一つに数えられている。しかしながら、近代に入ると、次第に時代から取り残されるようになり、特に戦後は急速に活気を失う。そのような状況下で、1901年(明治34)建設の芝居小屋・永楽館も、1964年(昭和39)には閉館となる。

ところが、1960年代の中ごろから地域活性化の取り組みが始まり、1980年代の終わりごろからは、歴史や町並みを生かした町づくりに向けての動きが活発になってくる。そして、出石町は、1987年(昭和62)に兵庫県の景観形成地区に指定され、合併後の2007年(平成19)には旧出石町の一郭が伝統的建造物群保存地区に指定された。そのころ、豊岡市は、永楽館を取得して復原工事(「平成の大改修」)に着手する。伝建地区の指定は、永楽館の復原にも活用された。2008年(平成

20)に「平成の大改修」は完了し、片岡愛之助らの出演で「こけら落とし大歌舞伎」がとり行われ、町はお祭りムードに沸いた。愛之助らの公演は、次年度以降も、「永楽館大歌舞伎」として定例化している。

群馬県大間々町(現みどり市)の「ながめ余興場」の復興も、町づくりの過程で実現したものである。しかし、こちらは、内子座や永楽館のように、大きな町づくりのコンセプトのなかに芝居小屋が位置づけられたというよりも、町づくりの「運動」から単体で紡ぎ出された趣がある。

ながめ余興場は、この土地の遊園地内に、1937年(昭和12)に建設された劇場である。昭和30年代にこの遊園地及び劇場は最盛期を謳歌したというが、この劇場もまた、1965年(昭和40)に芝居興行の最期を迎えることになった。その後も、映画館としては比較的遅くまで活動を続けていたが、ついに1987年(昭和62)の遊園地閉鎖にともない、休眠状態に入る。1990年(平成2)には、開発計画のため大間々町(当時)が買い取り、町所有になっていた。

丁度そのころ、竹下内閣の「ふるさと創生一億円事業」が始まり、大間々町でも1991年(平成3)に住民と町職員で構成するプロジェクトチームが発足した。そして、この活動をとおして「ながめ余興場」が再発見されるのである。チーム解散後、旧メンバーのうちの有志が集まり、1993年(平成5)に、ながめ余興場を核に伝統と文化を中心としたまちづくりを進めるための支援団体「ながめ黒子の会」が発足する。ながめ黒子の会は、ながめ余興場を舞台に、人気役者・梅沢富美男の公演など、精力的な活動を展開する。こうした活動が実を結び、1996年から1997年(平成8-9)にかけて、大規模な改修工事が行なわれ、保存は確実なものになった。ながめ黒子の会のこうした活動は高い評価を受け、地域づくり関連の表彰を何度か受けている。

(6) 芝居小屋復興の岐路

ここまで、いくつかの芝居小屋の復興の「成功」事例とその背景をみてきたが、もちろん、こうした試みがいつも実を結ぶわけではない。広島県府中市上下町に「翁座」という、かつての芝居小屋がある。大正末年に建設されたもので、京都の南座の内部を模したといわれている。この芝居小屋も、1960年代の初めごろに閉館し、長く物置状態が続いていた。ところが、1980年代に入って地元素人劇団が結成されたり、町おこしグループが発足したりして、見直す動きが起こり、落語会、一人芝居、ロックコンサート、神楽、講演会などが散発的に開かれるようになる。

そうしたなか、1993年(平成5)になって、人気タレントの萩本欽一がゲスト出演した地元テレビ番組で翁座が紹介され、萩本が自ら監督した映画の上映を呼びかけたことで、復興への気運が一気に盛り上がる。翌1994

年(平成6)4月には、「翁座復興を支援する会」の設立準備委員会が結成され、同年9月の上映会では、県内外から集まった客で翁座はあふれかえったという。この成功を受けて花道や棧敷も再建された。1997年(平成9)からは、年に一度、舞踊、演劇、音楽、手品など、町内外のグループが集まり、芸を披露する「翁座まつり」も始まる。2000年(平成12)には、県の補助で外壁も整備され、国民文化祭広島2000の演芸会場にも選ばれた。

ところが、この芝居小屋は、2010年(平成22)3月末をもって、結局は閉館することになる。光熱費や借地料に加え、老朽化で雨漏りがひどくなった屋根の修復にも多額の費用が見込まれ、市から交付されていたわずかな補助金も財政難で毎年減額されていた。この芝居小屋は個人経営であり、私費での維持には限界があったのである。

芝居小屋復興の運命の分かれ目はどこか、難しい問題である。石川県小松市の粟津演舞場は、収容人数250人ほどの小さな芝居小屋である。以前は旅館の倉庫として使われており、地元住民からも、かつて芝居小屋であったことさえ忘れられていた。それが、2004年(平成16)、全国の芝居小屋の復興に関わってきた一人の建築家の目に偶然留まったことをきっかけに、一気に復原へと走り出す。建物の構造などの調査が断続的に行われ、2009年(平成21)には「粟津演舞場を救う会」も結成される。そして、国の「街なみ環境整備事業」に採択されたり、小松市も整備費を支出したりして、2014年(平成26)にみごと復活を果たすのである。この芝居小屋が「発見」されてから、わずか10年のことであった。

いったん閉館した翁座にも、捲土重来のチャンスがないとは、まだ言い切れない。

(7) 芝居小屋でない芝居小屋という選択
復興運動が続いているものの、まだ本懐を遂げるに至っていない芝居小屋としては、でか小屋(石川県七尾市)、鶴川座(埼玉県川越市)などがある。他方、本来の芝居小屋としての復活は無理としても、別の意義づけでの保存を目指す例もある。茨城県日立市には市立の武道館があるが、これは、元来は「共楽館」という名の芝居小屋であった。日立市はもとも鉾山で栄えた町であり、共楽館は、秋田県小坂町の康楽館と同じく、鉾山従業員の福利厚生施設として、1917年(大正6)に建設されたものである。1960年代の初めごろ、この芝居小屋の利用はすでに映画上映が主流になっていたが、それも減少して小屋の存在意義が問われるようになる。

そして、1967年(昭和42)には、建物が日立市へ寄贈されたのを受けて、廻り舞台、奈落、花道、映画向け固定椅子、2階棧敷席などが撤去され、外観はもとの芝居小屋のまま、武道館に転用されることになった。ここに共楽館は、「芝居」小屋としての役目を終えるのである。しかし、見方を変えれば、他用

途に転用されることで、芝居「小屋」は生き残る道が開けたともいえよう。

この(元)芝居小屋についても、1990年代の初めごろから地域文化の発信基地にしようという声が上がりはじめ。1993年(平成5)には「共楽館を考える集い」が発足し、芝居小屋としての共楽館の復権と活用・復元に向けて活動を開始する。1990年代の半ばごろには、鉦工業都市という地域の歴史特性を踏まえ、守るだけの「文化遺産」ではなく、活用する「産業遺産」を、という方針も明確になってくる。この方針のもと、芝居小屋も産業遺産群のなかに位置づけられ、同会は、1997年(平成9)に全国町並み保存連盟に加盟する。こうした運動は徐々に実を結び、1999年(平成11)には、「旧共楽館」が国の登録有形文化財に認定され、「共楽館を考える集い」も、2000年(平成12)に、総務省の「ふるさとづくり」表彰を受けた。

こうした運動と成果に応えるように、行政の側でも、この(元)芝居小屋の保存と積極的活用に向けての施策が図られるようになる。2001年度(平成13)の日立市の基本計画には、「産業遺産再発見事業」と「共楽館活用の検討」が掲げられ、産業遺産による町おこしが明記された。そうしたなか、2003年(平成15)の調査で、雨漏りや老朽化の実態が明らかになる。また、2006年(平成18)の耐震調査では、「震度6で倒壊の恐れあり」との結果が報告された。こうした登録有形文化財の危機的状況を前に、日立市は、「旧共楽館」の保存の意思を明らかにし、2010年(平成22)には創建以来になる大改修に着手する。そして、翌2011年(平成23)3月11日、東日本大地震の発生である。日立市も震度6の強烈な揺れに見舞われた。しかし、共楽館は耐震工事完了後(正式の竣工は後日)であったため、ほとんど無傷で健在であった。この(元)芝居小屋にあっては、まこと不幸中の幸いであったというべきであろう。

復活した(旧)共楽館は、外観は広大な劇場の威容を誇っているが、内部及び機能、それにこの公共施設の位置づけ(名称)は、あくまでも日立武道館であって、けっして芝居小屋ではない。そういう意味では、芝居小屋の復興はまだ道半ばであり、「共楽館を考える集い」の活動はいまも精力的に続けられている。しかし、復興運動の関係者のなかにも、芝居小屋としての再生は非現実的だとして、それを近代化産業遺産(群の一つ)として位置づけ、「芝居」小屋ではない芝居「小屋」の保存の積極的意義を見出そうとする考えがある。一つの知見と方向性であろう。

(8)「小屋」と「芝居」の相生と相剋

首尾よく芝居小屋としての復活を果たし、市民権を確立しているように思われる芝居小屋にも課題は多い。それは、簡単にいえば、「小屋」(建物)と「芝居」(活動)との相生と相剋ということが出来る。建物としての芝居小

屋の側面に着目すれば、それは(有形)文化財として、復原、保存、展示に焦点が置かれることになる。他方、もともとの興業施設としての機能を重視すれば、復興、利用、公演(事業)に期待が寄せられることになる。古い芝居小屋は、守られるべき文化遺産なのか、活用すべき(活用可能な)経済資源なのか。もちろん、双方の両立ないし相生(相乗)が望ましい。しかし、現実には両者の葛藤(相剋)も珍しくない。最後に、この問題をめぐる興味深い事例を紹介して、報告を終えたい。

愛媛県内子町の内子座は、夏の恒例公演「内子座文楽」でよく知られている。しかし、現在に至る道のりは、けっして平坦だったわけではない。この公演は、1995年(平成7)の内子の町制40周年記念事業の一つとして開かれたのがきっかけである。以後定例公演化するが、1999年(平成11)の第5回公演をもって、いったん取り止めになる。それは、大幅な赤字が続き、また町内の意識にも落差があり、町議会でも追及を受けるなかで、町おこし事業とはいえ、町が大きな負担することはできない、との判断によるものであった。

ところが、2002年(平成14)になって、「内子座文楽」は、およそ3年ぶりに復活する。再開にあたっては、町の担当部署がそれまでの町並保存対策課から教育委員会へと移った。これは、「町興しや経済の活性化を図る」という商業・観光面を重視した当初の目的から、日本の誇りである伝統芸能＝文楽と、全国的にも珍しくなった芝居小屋＝内子座という二つの貴重な文化遺産を次世代に継承していくことを柱とする文化振興面を強調した考えによるものであったという。また、教育的な観点から小・中学生が文楽に親しむ取り組みも進められた。収支の問題では、文楽公演の文化的意義を国や県などにアピールし、助成や支援を得るなどの努力もなされたという。(内子町公式ホームページ参照)

芝居小屋の保存と活用をめぐる試行錯誤は、今後も繰り返される永遠の課題なのかもしれない。

【参考資料・文献・ウェブページ】

必要最小限のものを本文中に示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

芦田 徹郎 (ASHIDA, Tetsuro)

研究者番号：20151053

以上